

教 仏 名 聞

第4号
(発行日)
2011年1月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○ 共学会—毎月6日午後7時始
○ 真宗入門講座—毎月18日
午後6時半始
* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

名となりたもう仏

【ご先祖と仏】

「仏様を拝む」へ仏様を大事にする。という言葉をよく耳にしますが、座談会などで「あなたにとつて仏様とはどんなお方ですか」と質問をしますと、多くの方が「先祖様です」と答えられます。

この答えは間違いとは言えませんが、もし阿弥陀仏を離れた「ご先祖という仏」なら、それは単なるご先祖様であつて仏様とは言えないでしょう。というのには亡きお方は私たちに「どうか南無阿弥陀仏をいただいで助かってくれよ」と私たちに勧め下さるお方であるがゆえに「仏の如し」と敬われるからです。

ところがお内仏で礼拝する場合、ご本尊の阿弥陀仏よりも先祖様を中心に拜んでいる場合が少なくありません。その理由は色々あるでしょうが、阿弥陀仏は私たちにイメージしにくいのに対して、亡き父母や祖父母はイメージしやすく親しみやすいの

【名で知らせる仏】

で、ついつい阿弥陀仏よりも亡き人たちに心が寄るのではないのでしょうか。けれども、単に先祖様を拜んでいるだけでは本当の意味で仏様を拜んでいることにはならないと思います。

そこで今度は「阿弥陀様とはどんなお方ですか」とお尋ねすると、「よく分からない」「なにかしら有難いお方」「親のよくな方」などの漠然とした答えが多く返ってきます。

宗教で神や仏を説かない宗教はありませんし、真実の神ないしは仏にあう「あるいはそれに目覚めるといふのが宗教の根本目的と言っているでしょう。ところが真実の神や仏をどう理解すればいいのか、どうしたらあえるのかという点で、世の中の多くの人は惑っていると思います。

ば、それは実に具体的に示されているので

というの

は、そういう大事な問題に惑うている私たちが真実の仏様はすでに知り抜かれて、ご自身の側からご自分を私たちに現して下さっているのです。

真実の仏様である阿弥陀仏は、私たちが愚鈍であつて真実を知らず、仏様といつても分からずに惑っているのをすでによくご存じで、そんな私たちのためにご自身を「南無阿弥陀仏」という言葉でお示しになりました。

「名で知らせる仏」を親鸞聖人は「方便ともうすは、かたちをあらわし、御名をしめして衆生にしらしめたまうをもうすなり」

と仰せられています。方便というのには、近づくということ、阿弥陀仏ご自身が南無阿弥陀仏の御名として私たちにご自身を近づけて知らしめたもうのです。

さらに申しますと、お釈迦様の説法(経典)を通して、善知識方の説法を通して、私たちに「念仏を申せ」とお勧め下さり、それによって私たちはナムアマダブツ、ナムアマダブツとお念仏を申させていただく。

そうするとおのずと、「南無阿弥陀仏」と私たちの耳に聞こえてまいります。こうして声として聞こえて下さる南無阿弥陀仏こそ、私たちにとつて真実なる阿弥陀仏のおすがたであり喚び声なのです。これははなはだ有難いことで、これによって、到底あえない私たちが真実の仏

謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

平成二十三年元旦

土井紀明 土井眞由実
中村穂積 迫田忠夫
宮野勲 中川政二

様にあうことができるので
す。

阿弥陀仏の慈悲は大変深く、仏様の方から私にあおうと働いて下さるからあえるのです。これは本当に驚くべき事です。このことを妙好人の松並松五郎さんは

「称える仏が 生き仏 喚ばれているとは、知らなんだ不思議不思議の 南無阿弥陀仏」

と詠んでおられます。ですからお念仏は称えるものというよりは聞かされるものなのです。しかし、称えなくては聞くことはできませんから、お念仏を申すことがまず大事になるのです。

【南無阿弥陀仏のいわれ】
それでは聞かされる南無阿弥陀仏はどういう意味の言葉なのでしょう。

南無阿弥陀仏のお心を阿弥陀仏の本願と申します。本願とは、阿弥陀仏が私たち一人一人に「助からぬ汝を助ける」「そのままなりで引き受ける」「必ず浄土に至らしめる」との大悲の仰せであり誓いであります。

ではなぜそれほどまでに仰せ下さるのでしょうか。



振分髪 I
(C)SHOGAKUKAN INC.

それは、私たちは自分で自分を仏になすとか、理想的な者に変えることができないばかりか、つねに死ぬ不安と死んで一体どうなっていくのかという不安をかかえている存在であること、いわゆる罪深煩悩だらけの生死の凡夫であること、そのことを阿弥陀仏は知りつくされたからです。

そしてそんな私たちをまるまる引き受けて仏にしてやるう、浄土に至らしめてやりたいとの願いを越し修行して、その結果、私たちをさわりなく助けたもう南無阿弥陀仏になられたのです。そうして私たちに南無阿弥陀仏と喚びかけ、「そのままなりで助ける」と仰せ下さるのです。

私たちは聞かしていただくお念仏においてこの大悲の心に喚びさまされ、お助けにあらうことができるのであります。(了)

正信偈に学ぶ問答

(二十五)

獲信見敬大慶喜 即横超截五悪趣

書き下し文（信を獲て見て敬い大きに慶喜すれば、すなわち横に五悪趣を超截す。）

現代語訳 信をえて大いにするこび敬う人は、なだち本願力によつて迷いの世界のきずなが断ち切られる。

ここは前に続いて信心の功德を説かれたところです。宗祖はここを『尊号真像銘文』にご自身による註釈をしておられます。それには

獲信見敬得大慶といふは、この信心をえておほきによるこびうやまふ人といふなり。大慶はおほきにうべきことをえてのちによるこぶといふなり。即横超截五悪趣といふは、信心をえつればすなはち横に五悪趣をきるなりとするべしとなり。即横超といふは、即はずなはちといふ、信をうる

人はときをへず日をへだてずして正定聚の位に定まるを即といふなり、横はよこさまといふ、如来の願力なり、他力を申すなり、超はこえてといふ、生死の大海をやすくよこさまに超えて無上大涅槃のさとりをひらくなり。とあります。

G 「信を獲て見て敬う、とはどういう意味ですか」
D 「信を獲るとは阿弥陀仏の大悲のお心にであい、そのお心を獲る。獲るといふのはいただけ、といていいのでしよ。

*

G 「お心をいたたくとは」
D 「仏の大悲のお心が私の心に至って離れなくなることです。そうすると、そこに見て敬うということが出てきます。見て敬うというのは阿弥陀仏のお心を思い浮かべ見るということ、大悲のお心を有難く思うこと、大慈のお心を尊く敬うようになります」

G 「大いに慶喜するというのは」
D 「阿弥陀仏の大悲の心にあうと、当然喜びが起こります。阿弥陀仏のお心に包まれ、阿弥陀仏が私の心の主となり、たもうということですから、これは何にも代え難い喜びです」
G 「それは大きな喜びなのですね」
D 「ええそうです。またここで、大いに喜ぶといわれるのは、法の側からいえば、大いに喜ばれるべき法なのだともいわれるのでしよ」

G 「では、実際に人はそれほど喜べるのでしょうか」
D 「それほど喜ばしいことをどれほど実際に私が喜んでいるかという、実に申し訳ないほど現実の人生生活では喜びは乏しいです」
G 「本願に助けられるということは大きに喜ぶべきことでありながら、実際にはそれほど喜べないのですね」
D 「阿弥陀仏のお助けにあいながら、それがどれほど尊いことだとも知らない愚かな私だから喜びが乏しいのだと思います。申し訳ないことです。そしてまた、信をいただいて

阿弥陀仏に撰取された喜びは、この世の喜びに比べて質的に非常に勝れた喜びですから、大慶喜と仰せられるのでありましょう」

G 「この世の喜びというのは、健康であることや家族の団らんや音楽や旅行やスポーツの楽しみなどをいいますね」

D 「ええ、そういう喜びは一時的であり心の表層での喜びですが、阿弥陀仏にであった喜びは、阿弥陀仏が私の主となつて下さった喜びであり、もはや壊れないものです。それは生まれて死ぬるといふ根本苦を超えさせていただいたという喜びといつてもいいと思います」

G 「いわゆる生死の苦を超えた喜びなのですね」

D 「ええ、それで次ぎに信を獲れば、へすなわち横に**五悪趣を超越す**といわれるのです。即横超越へすなわち横に超越す」というのは、即座に、迷いの世界を断ち切つて横に飛び越えて、迷いの世界を断ち切り仏の世界に至る、こういう利益を獲るのですよと仰せられるのです」

G 「五悪趣というのが迷いの世界のことです。では五悪

趣とは」

D 「地獄界・餓鬼界・畜生界、人間界、天上界のことで、五つのけがれた苦しみの生存をいいます。阿修羅界をいれると六趣になります」

G 「なぜ人間界や天上界も悪趣なのですか」

D 「それは浄らかな安らかな浄土に対してなお悪しき境界だからです」

G 「地獄界とか天上界とかいう五つの境界をどう受けとればいいでしょうか」

D 「これについてはいろいろのこと言われていますが、私の今の了解ではおよそのように考えています。事象を一応知る心と知られる世界に分けて考えれば、今私の感知している境界は人間界だといえ

ます。人間世界を生きているということとは人間世界を感知しつつかあるということ。その感知しているとは、見たり聞いたり知覚していることです。その見聞覚知している主体が心であるといつていいと思います。その心が人間としての世界を感知しているのです。その感知している領域を人間世界といい、感知している心を人間心とい

るのであります。その見聞覚知しているのは人間世界と

のであります。その見聞覚知する心の状態によつて、その心に感知せられる世界も変わつてまいります。いわゆる心の内容、状態、レベルによつて、感知される境界が違

つてくるといえましょう。その違いによつて浄らかな浄土の世界があれば、苦しい迷いの世界があると言われている

のです。その苦しい迷いの世界を大きく六つ（六趣）とか五つ（五趣）に分けられてい

るのです。その中に人間界もあれば地獄界もあるといふことになりま

す。G 「そうすると今私が感知しているのは人間世界を感知しているのですね」

D 「ええ、そうなんです。ただ人間世界として感じていてもそれは真実ありのままの世界ではなくて、迷える人間心によつて色づけられた虚構の世界だといふのが仏教なので

す。だから苦しみが多く争いが多い、いわゆる苦の世界といわれるのです。そして浄土こそ真実の領域といわれているのです」

G 「難しい話になりましたね。それで、信を獲ると五つのけがれた苦しみの境界を断ち切

つて浄土に至る身になるといわれるのですね」

D 「ええ、そうなんです。それは非常に大きな利益です。ですが、私たちは今まで生まれかわり死にかわり地獄や餓鬼などの六つの境界をめぐつてきたことも知らず、またこの先、めぐるしかない流転輪廻の身であることを知ら

ず、さらに真実の浄土は智慧と慈悲の支配している浄らかな境界であることが実感として分ならず、またさまざまに衆生を救う功德までもが与えられるといふその功德の有り

難さの実感が乏しいのです。ですから、南無阿弥陀仏にありましていただき、へ汝を助けると喚んで下さる南無阿弥陀仏の御心をいただいて、迷

いの境界を超えて浄土に至ることが決定しても、そんなに喜ばないのです。いただいてい

ている南無阿弥陀仏のお徳が私たちが感じている範囲の恩徳より遙かにすぐれた広大なお徳であることが分かります。私たちが喜ぶが小さいので

しょう。G 「だから私たちの喜びは乏しいのですね」

D 「ただ私の喜びは小さくても、浄土に生まれることは阿

弥陀仏のお力一つによつてです。浄土往生は私の喜びの大小に係なく全面的に阿弥陀仏の大悲の願力によつてなし

遂げて下さるのです。有難いですね」

G 「一足飛びに横さま生死を超えて浄土に生まれることができるのはどうしてですか」

D 「横は堅に対する言葉で、堅とは自分の修行の力によつてだんだん仏に近づいていくというイメージ言語ですが、横とは本願他力に私たちを乗せて、一足飛びに覚りの世界に至らしめることを表すイメージ言語です。こうして阿弥陀仏の力によつて浄土に生まれるのです」

G 「信心とすることはどういふ関係にあるのですか」

D 「信とは、助けたもう阿弥陀仏をたのむこと、阿弥陀仏の本願他力に乗ることです。乗れば浄土に至るのです。それ

もこの世で阿弥陀仏をたのむ信を獲ると即座に浄土に至る身になるので、即横といわれるのです」

G 「そうすると私たちにとつては信を獲ることが一番大事な

ことですか」

D 「ええ、そうです」（了）

信心夜話

『一蓮院秀存師の語録より』

(太字の文が一蓮院師の言葉です。カッコ内は私の所感)

つづまらせられたぞや、つづまらせられたぞや、お助け一つにつづまらせられたわえのう。これを聞いて聞いて聞きぬいて、云うて云うて云いぬいて、しまいには仏にしてくださいさるのじや。

*

この一蓮院師の言葉について、信心の名師といわれた今井昇道師は感想を次のように述べられています

(私いわく、このお言葉などは、実に何ともかとも云いようのないほど有り難い。貴方がお助け一つにつづめあげて下されたのが、今また私に顕れて、お助け一つにつづまらせて下された。お助けお助け。このお助け一つより外に、一切の聖教もありはせぬ。七祖は勿論、祖師蓮師のお喜びも恐らくはこの外にはあるまじと推したてまつる。)

私たちはみな幸せになりたいと思っいろいろなことを学びます。いろいろな講演や講義や教訓や説教を聞きます。し

かし、多くは何が真理やら何が本当やら、どこに幸福の道があるのやら、うやむやのままで一生を終えてしまします。努力

して求め、大方どうあるうと見当がついた頃ははや残された人生は少ないというところもあるでしょう。「日暮れて道遠し」という言葉の通りです。またたとえ仏教にであって、仏教は素

晴らしい教えであると思っても、仏教の教えは八万四千といわれるほど様々に説かれていて、学んでも学んでも茫漠としていて真実に行きつくことは容易ではありません。森に分け入っても分け入っても林の木々があるだけで、目的の宝は見つからないようなものです。

これは仏教の教えのせいというより、私たちが愚かだからと言えましよう。「牛羊眼易迷」(牛羊の眼、迷い易し)という聖覚法印の言葉がありますが、私たちの心の眼は牛や羊の眼のように愚かであるとしていて、何が真実であるかどこに真実があるかを見通すことがなかなかできません。

しかもやつと仏教の教えの中で私には浄土真宗こそが救いであると気がついて、真宗のお話を聞くのですが、聞いても聞いても、何が核心でありどこに救いがあるのか、そのことが分からぬままに年月だけがたつてしまし、「どうも分かりません」「まだうろろうろしています」という嘆きに留まる場合が少なくありません。

ところが、こういう状態に凡夫はなり

やすいことを阿弥陀仏はすでによくご存じで、そんな私どもに真実を与えるにはどうしたらいいか、真実を知らせるにはどうしたらいいかを長い間御思案になりました。

そして遂に南無阿弥陀仏の御言葉に救いのすべてをつづめて下さり、しかもこの南無阿弥陀仏にご自身そのものを表現して下さったのです。南無阿弥陀仏の一つに阿弥陀仏の広大なまことをつづめて、これを私たちに与えんがために、「南無阿弥陀仏を称えよ、聞けよ」とお勧め下さるのです。

私たちはこのお勧めにしたがつて南無阿弥陀仏を称え、南無阿弥陀仏を聞く時、そこに求めても求めても分からなかった真実そのもの、仏そのもの、お助けそのものを見出すことができるのです。

繰り返しますが、私たちが愚鈍のゆえに永劫に迷うて来た。そんな私たちを哀れみ助けんとして思案を尽くして、真実そのものを南無阿弥陀仏につづめ、私たちがたやすく受け取れるように仕上げて、これを称えよ、これを聞けよ」と勧め下さる。この御名でも、そのままなりで助ける、間違いないと喚びつめに喚んで下さるのであります。これは非常に有難いことです。

ですから私たちは、これを聞いて聞いて聞きぬいて、云うて云うて云いぬいていくところにお助けが与えられるのであります。云うとは南無阿弥陀仏を云う、すなわちお念仏することです。

しかるに、せっかく真宗に会いながら、南無阿弥陀仏を称えることをせず、仏書を読んだり法話を聞くだけの開法がありますが、機根の勝れた人はそれで真実に

あうこともできましようが、愚かな者にとつては、それではなお真実に遠いのではないでしようか。

しかるにまずはお念仏を申す。そうすると、南無阿弥陀仏は阿弥陀仏のお助けそのものであり、阿弥陀仏ご自身であり、阿弥陀仏の大悲そのものですから、称えつつ南無阿弥陀仏を聞くなら、阿弥陀仏のお心に接触していることになって、ついに時いたって、「汝を引き受ける」という阿弥陀仏の大悲心が凡心に流れ込んでくださるのであります。

(了)

〈出講法話予定〉

*二月十日・十一日。大阪市・難波別院。

午後一時半始。

*二月十九日。堺市戎之町。西然寺。

午後二時始。

*四月九日・十日。広島市安芸区。

龍善寺。午後一時半始。

平成23年度御年忌年回表

1周忌	平成22年亡
3回忌	平成21年亡
7回忌	平成17年亡
13回忌	平成11年亡
17回忌	平成7年亡
23回忌	平成1年亡
27回忌	昭和60年亡
33回忌	昭和54年亡
50回忌	昭和37年亡

(23回忌と27回忌をせずに25回忌にいとむ数え方もあります。また50回忌以後は50年ごとになります)